

古代における「酒に浮かべる」こと

原田 麻悠

はじめに

古代の詩や歌に、「酒」を詠んでいる作品は数多く見られるが、ほとんどが酒宴での作品である。そもそも酒は神事との関わりが深く、さらに神事と宴とが切っても切れない関係であったことが影響しているのだろう。

その中に、酒杯に何かを浮かべる表現がいくつか見られる。浮かべられているものは様々であるが、各注釈書では、いずれも中国からの影響とされている。丹羽晃子氏^{注1}もまた、これらの表現は「舶来の風流である」と述べる。

確かに、以下にも見るように、中国詩文の影響は顕著である。しかし、酒に浮かぶものは、植物ばかりではない。そこには「風流」を超えた意味があるのではなからうか。本稿では、酒に何かを浮かべる表現を総合的に取り扱っていきたいと思う。

一、菊花

酒杯に花を浮かべることについては、重陽の節句に飲まれる菊酒を例に挙げることが多い。確かに菊酒すなわち菊を浮かべた酒は詩にたびたび登場する。例えば、北周・庾信「齊に聘し秋の晩に館中に酒を飲む」(『庾子山集』巻四)には、次のようにある。^{注2}

残秋欲屏扇 残秋扇を屏めむと欲し

餘菊尚浮杯 餘菊尚ほ杯に浮かぶ

重陽の節句では高いところに登り菊酒を嗜む習わしがあり、その起源となる伝説が『続齊諧記』に記されている。汝南の桓景は、費長房に従って遊学していたが、ある時、長房が桓景に、九月九日、お前の家に災いがあると言い、赤い囊を作り、茱萸を盛って臂に繋ぎ、高所に登って菊花酒を飲ませれば、此の災いを逃れられると指示する。その通りにして夕方帰ってみると、家畜が全て

死んでいた。今、世の人がこの日に高所に上り、婦人が茱萸の囊を持つのはここから起こったと伝える。^{注3}

また、『芸文類聚』九月九日には次のようにある。

續晉陽秋曰。陶潛嘗九月九日無酒、宅邊菊叢中、摘菊盈把。

坐其側久、望見白衣至。乃王弘送酒也。即便就酌醉而後歸。

（中略）臨海記曰。郡北四十步、有湖山。山甚平正可容數百人坐。民俗極重、每九日菊酒之辰、議會於此山者、常至三四百人。

『續晉陽秋』に曰はく。陶潛嘗つて九月九日酒無し。宅邊の菊叢中に、菊を摘み把に盈たす。其の側に坐すこと久しく、白衣の至るを望見す。乃ち王弘酒を送るなり。即便ち就きて酌み、酔ひて後歸る。（中略）『臨海記』に曰はく。郡北四十歩、湖山有り。山甚だ平正にして數百人を坐すべし。民俗極めて重く、九日菊酒之辰ごとに、此の山に議會する者、常に三四百人に至る。^{注4}

これらの風習が、古代日本に伝わっていたことは確かである。同様に菊酒を嗜んでいたことが『凌雲集』に窺われる。

重陽節神泉苑、同賦三秋大有年、題中取韻、尤韻成篇

晏氣何寥廓 晏氣何ぞ寥廓なる、

登高望悠悠 登高望悠悠なり。

大田獲豐稔 大田豐稔を獲、

從此歲工休 此より歲工休む。

芳莢筵上薦 芳莢筵上に薦み、

時菊盞中浮 時菊盞中に浮かぶ。

林洞逢搖落 林洞りて搖落に逢ひ、

池清為潦收 池清くして潦收を為す。

蟋蟀藏聲曉 蟋蟀聲を藏むる曉、

兼葭變色洲 兼葭色を變ふる洲。

重陽常宜宴 重陽常に宴に宜し。

況復有年秋 況むや復年有る秋を。^{注5}

重陽の宴の詩であることは題詞に記されている。第二句に「高」とところに登ると、四方の眺めは遠くはるばると見渡される」と詠み、第五・六句で「酒宴の席ではかぐわしい茱萸を人々にすすめ、酒杯の中には秋の季節に咲く菊が浮かんでいる」と言うのは、すべて先の中国での風習の踏襲である。第十一句「重陽常宜宴」からは、重陽節の詩宴がこの詩の詠まれた弘仁当時には年中行事として毎年開かれていたことがわかるだろう。

ただし菊の花を浮かべる酒は、奈良時代の『懷風藻』には多くない。安倍広庭の「五言。秋日於長王宅宴新羅客。一首。賦得流字」があるのみである。

山牖臨幽谷。

山牖幽谷に臨み、

松林對晚流。

松林晚流に對かふ。

宴庭招遠使。

宴庭遠使を招き、

離席開文遊。

離席文遊を開く。

蟬息涼風暮。

蟬は息む涼風の暮、

雁飛明月秋。

雁は飛ぶ明月の秋。

傾斯浮菊酒。

斯れの浮菊の酒を傾けて、

願慰轉蓬憂。

願はくは轉蓬の憂を慰めむ。^{注6}

しかもこの詩には「重陽」という文言もなければ、「高所に登る」、

「茱萸を帯びる」などの風習を想起させる句もない。

これについて辰巳正明氏は、文武天皇が、先帝である天武天皇の忌日のために重陽を廃止し、それによって日本古代の文獻に希薄になるのだとしている。^{注7}氏のいう通り『万葉集』には菊の花が詠まれているものは一首としてない。対して、同じように植物で中国由来のものだとされている梅はおよそ一九首もあるのだから、菊が詠まれないのは、九月九日が皇統の祖、天武天皇の忌日であつたことに大きな理由が存するのだらう。

安倍広庭の詩は、長屋王邸での新羅の使者を送る詩宴での作である。辰巳氏は、国を隔てているものの共有している文化があり、そこに使節への思いを託すために菊酒が詠まれているのだという。

要するに、国際的な場だからこそ、国忌と関係なく、菊酒を飲むことが歌われたのであらう。奈良時代の終わりに、皇統が天智系に移ると、九月九日は公式に毎年祝われることになる。しかし菊を酒に浮かべる風習自体は、奈良時代に既に伝わっていた。

二、梅花

菊花を浮かべた酒が中国の風習に影響を受けて詠まれたことは分かったが、他の花ではどうか。『万葉集』の歌に花を浮かべているものには以下の三首がある。

① 春柳縵に折りし梅の花誰か浮かべし酒杯の上に

(卷五・八四〇、沓岐目村氏彼方)^{注8}

② 梅の花夢に語らくみやびたる花と我思ふ酒に浮かべこそへ一に云ふ「いたづらに我を散らすな酒に浮かべこそ」

(卷五・八五二)

③ 酒杯に梅の花浮かべ思ふどち飲みての後は散りぬともよし

(卷八・一六五六、大伴坂上郎女)

いずれも梅の花である。①は天平二(七三〇)年に大宰府の長官であつた大伴旅人が開いた梅花の宴において詠まれた三二首のうちの一首であり、②はその後追和された四首のうちの一首である。

大宰府で開かれた梅花の宴には、多く先行の研究があるが、それぞれの歌を深く研究するものは少ない。①の作者、壹岐目村氏彼方について、壹岐目は「壹岐国の四等官。壹岐は下国で、守一人、目一人が定員。」「目」は少初位上相当官」とし、村氏彼方については「村氏」が村国氏かと述べるが未詳とされる（伊藤博『万葉集釈注』。以下『釈注』）。

前三句「春柳纏に折りし梅の花」における春柳と梅花について、澤瀉久孝『万葉集注釈』（以下『注釈』）は纏にするのは、柳や菖蒲であり、梅や桜はかざしにするのが通例であると述べる。「纏」（かづら）は、「植物のつるや緒に通した玉などを髪にさして飾りとするもの」であり、「挿頭」（かざし）は、「花や木の枝などを折りとりつて頭にさしたものの。玉をつけることもあった」と説明される（『時代別国語大辞典』上代編）。

挿頭と纏にするものについて、平舘英子氏^{注9}は、両者を比較しつつ、ともに「汎世界的な現象」として習俗から裝飾へと変化したとし、次の二首を挙げて、「纏」と「挿頭」の相違は表現上のものであって、その質を異にするものではない」と述べる。

つさはふ磐余の道を朝去らず行きけむ人の思ひつつ…鳴く
五月にはあやめ草花橘を玉に貫きへ一に云ふ「貫き交へ」
纏^{かづらにせむと}爾將^{をりかきむと}爲登 九月のしぐれの時はもみち葉を折挿頭^{をりかきむと}跡…万代に

絶えじと思ひて…

（巻三・四二三、山前王 或云 柿本人麻呂）
娘子らが頭挿^{かづら}乃多米爾^{たみ}みやびをの 纏^{かづら}之多米^{たみ}等 敷きませる国の
はたてに咲きにける桜の花のほひはもあなに

（巻八・一四二九、若宮年魚麻呂）
『万葉集』中、纏を含む歌は一七首ほどあるが、一番多く見えるのが柳、次いで菖蒲草である。数例を挙げれば以下の通り。

梅の花咲きたる園の青柳を 加豆^{かづ}良^ら尔^に志都々^{しつ} 遊び暮らさな
（巻五・八二五、少監土氏百村）

ほととぎす厭ふ時なしあやめ草 加豆^{かづ}良^ら尔^に勢武日^{せむひ} こゆ鳴き渡
れ
（巻一八・四〇三五、田辺史福麻呂）

君が行きもし久にあらば梅柳誰と共に 吾^{わが}纏^{かづら}可^か牟^む

青柳のほつ枝攀ち取り 可豆^{かづ}良^ら久波^{くは} 君がやどにし千歳寿くと
そ
（巻一九・四二三八、大伴宿禰家持）
（巻十九・四二八九、家持）

四二三八歌が梅と柳とを纏にするのにも、新編全集が、梅が纏に相応しくないと述べる。しかし花纏という語も集中に見える（巻十九・四一五三）から、必ずしも不自然ではないだろう。四二八九歌は、青柳の蔓を、長寿を祈る呪具とする。『万葉ことば事典』は、「かづら」を「もともと植物の生命力を身体に取り込むための

呪術行為」であつたという。平舘氏も、頭に付ける植物は「元来聖なる常緑樹であつたらしい」と述べていた。確かに挿頭にも常緑樹（巻七・一一八「檜」、巻十八・四一三六「ほよ」ヤドリギ）の例がある。青柳や花は、その鮮やかさが、装飾に傾きつつも、やはりその生命力が呪性を思わせるのであろう。

八四〇歌①の纏については、なお議論がある。契沖『万葉代匠記』（以下『代匠記』）精撰本は「纏ノ影ノ盃ニウツルヲ盃ノ上ニ誰ガ殖タルゾト云ヒナスナリ」と述べ、纏の影が映つたのを、誰かが水面に梅花を手折って植えたのか、の意に解している。また中西進『万葉集全訳注 原文付』は、纏にする春柳と酒杯に浮かべる梅花とのどちらも「折る」のだと見ている。『注釈』では先の四二三八歌や四二九歌を挙げ、梅花を纏に折るということが認められ、春柳という語は「纏」にかかる枕詞とみるべきだと述べている。さらに『釈注』では纏に柳が多く使われたことから、柳の纏を梅の花で彩つたのだとしている。

私見は、『注釈』に近い。実際に折つたのは梅であり、その折つた梅から花が散り、酒杯に浮かんだ偶然の景を詠んだのではないかと思う。初句「青柳」は枕詞的に使用された語とみるのである。そこに実物としての青柳を登場させるよりも、枕詞的に使用し人々に青柳をイメージさせ梅と対比させる方が景として美しいように

思える。「梅花の歌」であるから、梅の花が中心になっているのが自然であろう。

次に②について。こちらも先述の通り大宰府での梅花の宴に関連した歌であり、「後に追和する梅の歌四首」のうちの一首である。四首全体を挙げる。

後に追和する梅の歌四首

残りたる雪に交じれる梅の花早く散りそ雪は消ぬとも

（巻五、八四九）

雪の色を奪ひて咲ける梅の花今盛りなり見む人もかも

（八五〇）

我がやどに盛りに咲ける梅の花散るべくなりぬ見む人もかも

（八五一）

梅の花夢に語らくみやびたる花と我思ふ酒に浮かべこそ

（一に云ふ「いたづらに我を散らすな酒に浮かべこそ」）

（八五二）

作者は明記されていないが、大伴旅人とする説が多い。一人梅に向き合ううちに、夢に花が現れて自らを酒に浮かべてほしいと語るという内容である。この夢に現れるという点から、旅人が藤原房前に贈った、琴の娘と語り合う歌との関連が指摘される。

いかにあらむ日の時にかも声知らむ人の膝の上我が枕かむ

(巻五・八一〇、琴娘子)

言問はぬ木にはありともうるはしき君が手馴れの琴にしある
べし

(八一、旅人)

また『代匠記』は、花を酒に浮かべるのは、次の『遊仙窟』の
五嫂の詩の影響という。

極目遊芳苑

目を極めて芳苑に遊び

相将対花林

相将ゐて花林に対す

露淨山光出

露淨くして山光出で

池鮮樹影沈

池鮮やかにして樹影沈む

落花時泛酒

落花の時に酒に泛ぶ

歌鳥或鳴琴

歌鳥の或いは琴に鳴く

是時日將夕

是の時日將に夕ならんとし

携樽就樹陰

樽を携へて樹陰に就く^{注10}

「いたづらに」(二二) 散らしてしまわないで、酒に浮かべてほ

しい、と「みやび」な花と自負している梅の花自身が夢で語ると
いう趣向は幻想的である。『釈注』は、最初の「雪は消えても早く
散ってくれるな」という呼びかけ(八四九歌)に対して、梅自身
が答えるというつながりを指摘している。

花が自らを酒に浮かべてほしいという趣向は、『経国集』の次の
詩に似るのではないか。

重陽節神泉苑、賦秋可哀、応制 菅原清公

秋可哀兮

秋哀れぶべし、

衰三秋之爽節

三秋の爽節を哀れぶ。(中略)

秋可哀兮

秋哀れぶべし、

感秋情之易驚

秋情の驚き易きことに感ず。

蘭幸佩以擢秀

蘭は佩を幸ひて秀を擢づ、

菊憶杯而含馨

菊は杯を憶ひて馨を含む。^{注11} (後略)

これは菊についてではあるが、花が酒杯に浮かぶことを思つて香
ると詠う。酒に花を浮かべるのは花を「いたづら」にしない、つ
まり「みやび」な花が「みやび」でありうる行為なのだと考えら
れる。

最後に③は太伴坂上郎女の歌で、酒杯に梅の花を浮かべて仲間
と飲んだあとなら散つても構わないという歌である。並ぶ一六五
七歌は左注とともに状況の補足をしている。

官にも許したまへり今夜のみ飲まむ酒かも散りこすなゆめ

(巻八・一六五七)

右酒者官禁制傳京中閭里不得集宴 但親々一二飲樂聽許
者緣此和人作此發句焉

禁酒令が發布されている中の親族を招いての宴会である。この禁
酒令はおそらく天平四年のものであろうという。『釈注』は、この

歌が「冬相聞」に属していることから、「梅の蕾もしくは初花に咲き散る梅を幻想した歌なのかもしれない」とし、本当に咲いているならば「春相聞」に入れられたはずであると述べている。確かに歌からは梅が咲き誇り、散り始めた時節のことであるように受け取れるが、それならば「春」に属するはずである。「冬相聞」にあるということは、眼前にその景色は広がっておらず、想像の中にそれがあると考えるべきであろう。下の句は、梅花の宴における沙弥満誓の一首

青柳梅との花を折りかざし飲みての後は散りぬともよし

(巻五・八二二)

を明らかに踏まえている。この宴自体、大宰府における梅花宴を追慕して開かれたのかもしれない。

一六五七歌では宴に座すうちの誰かがその場を代表して「みんで飲むのは今日だけでなくあつてほしいから、梅の花よこの先も散ってはいけない」と詠む。『釋注』はこれを「逆説的な形で今夜の歓楽への讚美である」としているが、その通りであろう。

ここまで『万葉集』の花が酒杯に浮かぶ歌をみてきたが、前節に見た菊以外でも酒に花が浮かぶ表現をもつ詩はある。『凌雲集』所収、高丘弟越の次の詩である。

雑言。於神泉苑花宴、賦落花篇、應製

落花飛

落花飛ぶ、

飛去落丹墀

飛び去きて丹墀に落つ。

本謂隨風落

本より謂へらく風の隨に落つと、

方知乗化歸

方に知りぬ化に乗りて帰ぬと。

乍往乍還浮御盞

ある
乍は往き乍は還りて御盞に浮かぶ、

一連一斷點仙衣

あ。
一は連なり一は断えて仙衣に點く。

無心草木猶餘戀

無心の草木すら猶し戀を餘す、

況復微臣醉恩扈

況むや復微臣の恩扈に酔ふをは。

嵯峨天皇御製の「神泉苑花宴賦落花篇」に応じて作った詩で、

同じときに作られたであろう小野岑守の詩も残っている。題詞の「花宴」は弘仁三(八二二)年以来朝廷で開かれた春の花を觀賞する宴をいう。花が風に吹かれて舞い、酒杯に浮かんだり衣服に模様をつけたたりすることを歌い、このように草木ですら天子を慕うのだから臣下である我々が賜った酒によつて酔うのは当たり前であるとかう。この花が何の花であるかは明記されないが、第五・六句から伺える散る時に花びらが一枚一枚はらりと舞う様子からして桜であろう。ここで花は天子すなわち天皇を慕つて酒盃に浮かぶ。花に意思があるかのような表現は『万葉集』八五二歌や『経国集』の菅原清公詩と同様の趣がある。

漢籍については、『代匠記』の言う『遊仙窟』の他に、以下の例

が指摘されている。^{注12}

玉腕承花落

玉腕は花の落つるを承け

花落腕中芳

花落ちて腕中芳し

酒浮花不没

酒に浮かびて花は没せず

花含酒更香

花を含みて酒は更に香る

(北周・明帝宇文毓「王褒の摘花を詠ずるに

和す」『芸文類聚』木)

竹葉裁衣帶

竹葉は衣帯を裁ち

梅花奠酒盤

梅花は酒盤に奠く

年芳袖裏出、

年芳は袖裏に出で

春色黛中安

春色は黛中に安んず(後略)

(陳・徐陵「春情」、『芸文類聚』春)

菊以外の花が酒に浮かぶという発想も、中国伝来の「風流」のように見える。しかし、丹羽氏は、詩歌だけでなく、『古事記』

『続日本紀』の記事にも触れている。

又、天皇、長谷の百枝楓の下に坐して、豊樂を爲し時に、

伊勢國の三重の姦、大御盞を指し擧げて獻りき。爾くして其

の百枝楓の葉、落ちて大御盞に浮きき。其の姦、落葉の盞に

浮けることを知らずして、猶大御酒を獻りき。天皇、其の、

盞に浮ける葉を看行はして、其の姦を打ち伏せ、刀を以て其

の頸に刺し充て、斬らむとせし時に、其の姦、天皇に白して曰はく、「吾が身を殺すこと莫れ。白すべき事有り。」といひて、即ち歌ひて曰はく、

纏向の 日代の宮は 朝日の 日照る宮 夕日の 日光

る宮 竹の根の 根足る宮 木の根の 根蔓ふ宮 八百

土よし い杵築きの宮 眞木栄く 檜の御門 新嘗屋に

生ひ立てる 百足る 楓が枝は 上つ枝は 天を覆へ

り 中つ枝は 東を覆へり 下枝は 鄙を覆へり 上つ

枝の 枝の末葉は 中つ枝に 落ち觸らばへ 中つ枝の

枝の末葉は 下つ枝に 落ち觸らばへ 下枝の 枝の

末葉は あり衣の 三重の子が 捧がせる 瑞玉盞に

浮きし脂 落ちなづさひ 水こをろこをろに 是しも

あやに恐し 高光る 日の御子 事の 語り言も 是を

ば

故、此の歌を獻りしかば、其の罪を赦しき。

(『古事記』下巻・雄略天皇)^{注13}

十一月戊寅、天皇、朝に臨みたまふ。(中略)廿五日、御宴

あり。天皇、忠誠の至りを譽めて坏に浮かべる橘を賜ひき。

勅して曰ひしく、「橘は菓子の上にして、人の好む所なり。

柯は、霜雪を凌ぎて繁茂り、葉は寒暑を経て彫まず。珠玉と

共に光に競ひ、金・銀に交じりて逾美し。是を以て、汝の姓は橘宿禰を賜ふ」とのたまひき。

（『続日本紀』天平八年十一月条^{注14}）

『古事記』は三重姦が酒杯を天皇に献上する際、楓の葉（櫟）が浮かんでいることに気づかず献上し天皇の怒りを買うが、天皇を讃美したことで許され、褒美をもらうという物語。『続日本紀』は縣犬養三千代が元明天皇に橘姓を賜る際、橘の浮かんだ酒杯とともに賜るという場面である。

丹羽氏はこれらについて、『古事記』の三重姦の物語にて「めでたさが認められ」、『続日本紀』では「祝賀の意味をもつと確実に認識されていた」とし、酒杯に浮かぶということについて「初めから明らかな祝いの意味があつたのではなく、三重姦物語によってこのことが祝賀にまで強められたのではないか」と述べている。氏は、三重姦物語について、酒に葉が浮かんだことを「楓の葉の呪力を帯びた」酒となつたと言う。この「呪力を帯びた酒」という概念が重陽の菊酒と結びついたという点には私も同意したい。挿頭や纒が「植物の生命力を身体に取り込むための呪術行為^{注15}」であつたのと同様、その植物を浸して生命力を移したものを身体に取り込むという発想はありえたと思う。『続日本紀』の例も、枝も葉も丈夫な橘の生命力を酒に浮かべることを通じて摂取するのだ

と考えられよう。

しかし三重姦物語については、それ以上に、葉が浮かんだ様が創世神話と重なることが大事なのではないか。

故、二柱（イザナキ・イザナミ）の神、天の浮橋に立たして、其の沼矛を指し下して画きしかば、塩こをろこをろに画きながら、引き上げし時に、其の矛の末より垂り落ちし塩は、累り積りて島と成りき。はおのごろ島ぞ。（『古事記』上巻）
酒に何かを浮かべることは、そうした始原の風景を再現するようなどころがあるのではないか。酒の上に浮かぶのは、植物ばかりではない。

三、月

『万葉集』巻七・一二九五歌に月が酒杯に浮かぶことを詠んだ旋頭歌がある。

春日なる三笠の山に月の舟出づみやびをの飲む酒坏に影に見えつつ（巻七・一二九五）

作者は未詳である。月の船はおおよそ月そのものと捉えられているが、『古義』に「半月を船になずらへ」とあり、『評釈』は「当時の造船術の幼稚であつた為、概して小さく、細長い形のものであつた」とし「この船の連想させる月は、弦月である」する。『注

釋』にも「三日月の形を船にたとへ」たとある。しかし『萬葉集全注』（以下『全注』、巻七は渡瀬昌忠著）には、当歌の月は「宵に東の山からのぼる満月」であるため、ここは「月の形による比喩ではな」く、「西に沈んだ月は海原を漕いで移動してまた東から上るという古代的な考え方」による譬喩としている。

三笠の山に月の出ることを歌う旋頭歌は巻十にも見える。

春日なる三笠の山に月も出でぬかも佐紀山に咲ける桜の花の
見ゆべく（巻十・一八八七）

『全注』巻七は、一二九五歌を短歌に改めると「御笠山月の船出づ遊士の飲む酒杯に影に見えつ」となり、一二九四歌「朝づく日向かひの山に月立てり見ゆ遠妻を持ちたる人は見つつ偲はむ」と同じように山の上に月の見えることを詠んだ歌となると述べている。

集中に「月の船」という語を持つものは当歌を含めて三首ある。

天の海に雲の波立ち 月船 星の林に漕ぎ隠る見ゆ

（巻七・一〇六八）

天の海に 月船浮 桂梶掛けて漕ぐ見ゆ月人をとこ

（巻一〇・二二二三）

また「月舟」の例に、『懷風藻』一五の文武天皇の「詠月」がある。

月舟移霧渚。

月舟霧渚に移り、

楓楸泛霞濱。

楓楸霞濱に泛かぶ。

臺上澄流耀。

臺上流耀澄み、

酒中沈去輪。

酒中去輪沈む。

水下斜陰碎。

水下りて斜陰碎け、

樹除秋光新。

樹除りて秋光新し。

獨以星間鏡。

獨り星間の鏡を以ちて、

還浮雲漢津。

還に雲漢の津に浮かぶ。

第一・二句に掛けての解釈で一二九五歌と同様の議論がある。

この「月舟」という語は漢籍由来の語であると考えられてきたが、明確な典拠は見つかっていない。林古溪『懷風藻新註』の挙げる『文選』の「叩棧親月船、臨流別友生」（巻十六、陶淵明「辛丑歲七月赴仮還江陵、夜行塗口作」）は、万葉びとが見たであろう李善注本には「叩棧親秋月」となっていると小島憲之氏が指摘する。小島氏はその後李善注本だけでなく陶淵本もまた同様であることを示し、前掲の『文選』の箇所は「月船」の用例とはならず、『万葉集』や『懷風藻』における「月船」とは全く無関係であると説いている。

辰巳正明氏は、中国の〈桂と月〉という故事から、万葉集では二二三歌のように〈桂の梶と舟〉という関係が作られ、そこか

ら「桂の舟」(月舟)へと転じたと考えられると説く。^{注17}一方、中西進氏は『洞冥記』を引用し、これは漢武帝の故事によるものであるとし、現実の池月遊宴の「観月の船」であると解している。^{注18}しかし佐藤美知子氏は中西氏の挙げる『洞冥記』の引用部にある船は「仙術を習い或いは駆使する舟」だといい、「単なる観月の風流事ではない」と否定する。^{注19}登場する亀もまた「風趣をそえる態のもの」でなく「黄安の乗る長寿の霊亀に因む」と述べ、『洞冥記』全体が神仙的要素によつてなるとする。そしてこの神仙的風趣は『万葉集』や『懷風藻』には見えないとし、「月船」は「観月の船」を指すのではなく、「動態的・形状的な共通性」の強さから月の比喩であるとする。

月は東からのぼり西に沈む。空をひとつ海のように捉えた時に、その海をゆく月というのは船に擬せられてもおかしくはないだろう。ここは佐藤氏に従い、「月船」は月の動態的な面による比喩と考える。

さて文武御製の第四句「酒中去輪沈む」は、酒の中に月が見えることを述べている。こうした表現は、『懷風藻』の詩になお存在する。

盃酒皆有月。 盃酒皆月有り、
歌聲共逐風。 歌聲共に風を逐ふ。

(背奈王行文「秋日於長王宅宴新羅客。賦得風字」)

玉俎風蘋薦。 玉俎風蘋を薦め、

金疊月桂浮。 金疊月桂浮かぶ。 (藤原万里「仲秋釋奠」)

背奈王行文の作は長屋王の邸宅で催された新羅使接待の宴における詩であり、第一節で挙げた七一と同じ時の詩と推定されている。藤原万里の作は仲秋(八月)の釋奠の際の詩。「月桂」は、月の中に桂が生えているという伝説に基づく表現だが、ここは月そのものと考えてよいだろう。「金疊」は金の雲雷の模様のある立派な酒樽の意。釋奠に際し、それを供えているのである。弘安十年の釋奠の供物表を見るに「清酒 三斗六升^{注20}」とあるので、その酒は清酒であろう。月が映るには濁酒よりも清酒の方が相応しい。

月を浮かべる表現は『経国集』巻十三の巨勢識人「九日林亭賦得山亭明月秋應太上天皇製」にも見える。

月正午轉明 月正午にして転明らかなり、

古蘿松下照幽情 古蘿松下幽情を照らす。

今夕即重陽 今夕即ち重陽、

月樽唯是更生香 月樽唯是れ更生香^{注21}

「月樽唯是更生香」について、小島氏は、「月樽」は月の光の差し込む樽としつても用例が見えないという。また「更生香」とは「更に香を生ず」とも読めるが、『初学記』を挙げてこれは「菊の

花の香」であるとし、結び二句は「こよひこそ重陽の日だ、月の射す酒樽には人をよみがへらせる芳香の如き菊の香がただひたすら漂つてゐる」の意になるとする。

月の比喩的表現として「月船」を取り上げたが、これらは月を酒杯に浮かべる表現と関係するだろう。月を「月船」と称する時、空は『万葉集』の旋頭歌にもみられるように、海（河）に見立てられ、月はそこを渡っていく点から船に擬せられていた。これを酒杯の中に見るのである。酒を天（海）に見立てた時、そこに月の影という船が浮かぶ。さながら小さな天が酒杯の中に完成するのだ。

『懷風藻』の藤原万里詩に「盃酒皆有月」という表現があった。この詩が詠まれたのは長屋王の邸宅であり、新羅からの客人を招いての宴席であつた。浮かんだ月に「共有」の意識をみる時、万葉歌にも同じことを読み取れよう。一二九五歌において場を共有しているのは「みやびを」たちである。彼らが春日の三笠の山が見えるところで酒を飲んでいるところに月が現れ、「みやびを」たちの持つ酒杯に同じようにその姿を浮かばせる。いわば、各人がそれぞれ天を手中にするのである。

四、霞

霞を浮かべる表現について述べる前に、「霞」というものについて言及しなくてはならない。現代に思う「霞」とは、霧に類似したようなものであるが、上代においてはそれとは限らない。小島憲之^{注22}氏は、元来「霞」の字には、薄くかすむ日本語のカスミの意は無く、当時の詩人・字僧たちは、「霞」といえば、朝やけや夕やけなどの意とよく承知していたのであるという。詩を扱う際にはここに注意を払つて述べるべきであろう。

霞を酒に浮かべる表現は『万葉集』には見えないが、『懷風藻』には三首見られる。

雲疊酌烟霞。

雲疊烟霞を酌み、

花藻誦英俊。

花藻英俊誦む。

（犬上王「遊覧山水」）

君侯愛客日。

君侯客を愛づる日、

霞色泛鸞觴。

霞色鸞觴に泛かぶ。

（田中淨足「晚秋於長王宅宴」）

流霞酒處泛。

流霞酒處に泛かび、

薰吹曲中輕。

薰吹曲中に輕し。

（箭集蟲麻呂「侍讌」）

犬上王の詩は山水遊覧と題しているが、第二句に「遊息す、瑤池の浜」とあり、宮中の庭園での作である。第七句「雲疊酌烟霞」

に霞を浮かべる表現がみられる。「懷風藻全注釈」には「雲疊」を「雲の形を描いた酒樽」、「烟霞」を「靄」としたうえで「(我々は)雲疊に烟霞を酌み」と訳がされている。

田中淨足の作は、晩秋(九月)に長屋王の邸宅で酒宴を催した際の詩である。問題の表現は最終句にあり、これは「霞色」とあることから疑いなく、「立派な酒杯に秋の霞の赤い色が浮かんでいる」の意である。

簡集蟲麻呂のは侍宴詩である。第三句の「流霞」は、宋鮑照「代堂上歌行」に「陽春孟春月、朝光散流霞」(陽春孟春の月、朝光は流霞を散ず)の例があり、「空に赤くたなびく雲の類」をいう。酒処に浮かぶというのは、あるいは宴席に浮かんでいるのかもしれないが、いちおう酒に霞を浮かべているのだと見ておく。

類似的例は『経国集』の滋野貞主「重陽節神泉苑賦秋可哀、應製」詩にも見える。^{注23}

秋可哀兮

秋哀れぶべし、

哀秋暉之易斜

秋輝の斜き易きことを哀れぶ。

巖庭掃葉

巖庭に葉を掃ひ、

藤杯挹霞

藤杯に霞を挹む。

「藤杯挹霞」の句は「藤(ふぢかづら、蔓草の一種)で作つた酒杯を云ふ」と小島注にあり、さらに「挹霞」について『文選』の

例を挙げて「霞などの大気を飲食すること」であると述べている。

実は霞は仙人の食べ物(丹霞)という側面をもつ。犬上王詩では宮中を神仙世界になぞらえ、第十句「縦賞如談倫」では竹林七賢を示唆し、世俗から離れた世界を描いている。田中淨足詩について、小島氏は藤原宇合の「菊に泛かべる丹霞自らに芳有り(菊丹霞自有芳)」を挙げて、この「霞色」の色が赤色であることを示し、神仙思想と深く関係していたことが読み取れるという。また辰巳『懷風藻全注釈』に長屋王の邸宅が神山様式(仙人の住む東海の三神山をイメージしたもの)であり、これを詩で細かに描写することで仙郷の楽土を意味しているとする。簡集蟲麻呂詩は、末尾に「即ち此れ槎に乗る客、俱に欣ぶ天上の情」(即ち乗槎客、俱欣天上情)と、博物志の故事を踏まえ、^{注25}天上へ登った喜びを描く。

初唐詩にも霞を浮かべて仙人世界を示す詩がある。

門邀千里馭

門は千里の馭を邀へ、

杯泛九光霞。

杯は九光の霞を泛ぶ。

日落山亭晚、

日は山亭の晩に落ち

雷送七香車。

雷は七香の車を送る。

(卷七十二、周彦昭「晦日宴高氏林亭」)

第六句に高氏の林亭が仙人世界であることを詠んでいる。ここ

に日本の詩との直接の関係をみる事ができるかはわからないが、霞を酒杯に浮かべるということが、世俗と離れた仙人世界を表すという表現の生まれる素地はあったのではないか。

以上霞を浮かべる表現をみてきたが、これはその詩を詠んでいる場に仙郷を連想せしめ、理想である脱俗した世界に自分たちがいることを言っているのだろう。

おわりに

ここまで、酒の上に何かを浮かべる、あるいは何かが浮かぶ表現について見てきた。その多くは、漢籍に類例のあるものであった。その点で、「舶来の風流」と捉えるのは間違いいではない。しかし『古事記』の歌謡にも、盃に楓の葉が落ちたのを吉例としているように、それを受け入れる素地は日本にもあった。そして、それは創世神話と結びついていた。漢籍の表現も、ほとんどが養生術や神仙思想に基づいている。

植物を浮かべることは、その生命力を酒に移して体内に取り込むことであった。月を映すことからすれば、それは、いわば盃上を一つの海、一つの世界とすることと捉えられた。そして、霞を浮かべるのは、宴の場が神仙世界にあることを示していた。

以上をまとめれば、盃に浮かべる表現は、酒を大自然と繋げる

ことであり、それによって、その場や出席者を寿ぐことであつたと思われるのである。

注

注1 丹羽晃子『万葉集』における「梅花を酒盃に浮かべること」について

『東京経営短期大学紀要第二二巻』、二〇一三年三月。以下、丹羽氏とあるのはこの論文を指す。

注2 『庾子山集注』文華出版公司、民国五十七年による。

注3 佐野誠子『中国古典小説選2 搜神記・幽明録・異苑他(六朝)』

明治書院、二〇〇六年。

注4 中文出版社、一九七二年版による。

注5 小島憲之『國風暗黒時代の文學』中(中) 塙書房、一九七九年。以降『凌雲集』の引用はこれによる。

注6 小島憲之『懷風藻 文華秀麗集 本朝文粹 日本古典文学大系69』

岩波書店、一九六三年。以下『懷風藻』の引用はこれによる。

注7 辰巳正明『菊花の酒—平城京漢詩木簡の詩字』(『万葉集と比較詩学』
おうふう、一九九七年)

注8 佐竹昭広、木下正俊、小島憲之『補訂版万葉集本文篇』(塙書房、一九九八年)より引用。以下『万葉集』本文引用はこの書による。

注9 平館英子『萬葉歌の主題と意匠』塙書房、一九九八年。

注10 八木沢元『遊仙窟全講』明治書院、一九七五年。

注11 小島憲之『國風暗黒時代の文學』中(下) 1、塙書房、一九八五年。

注12 小島憲之『萬葉集と中国文学の交流』『上代日本文学与中国文学』中、塙書房、一九六四年

注13 山口佳紀、神野志隆光『古事記 新編日本古典文学全集1』小学館、一九九七年による。

注14 新日本古典文学大系『続日本紀』岩波書店、一九九〇年による。

注15 注9に同じ。

注16 「中国文学と万葉集」『上代日本文学与中国文学』補篇、塙書房、二〇一九年。

注17 『懷風藻全注釈』笠間書院、二〇一二年

注18 「万舟小論」(『万葉集の比較文学的研究』南雲堂校楓社、一九六三年

注19 「月の船」・「桂楫」をめぐって『萬葉集と中国文学受容の世界』

塙書房、二〇〇二年。

注20 『定本丹鶴叢書 第三卷 釈奠供物図・諸陵雜事注文・雜筆要集・春記』大空社、一九九七年。

注21 小島憲之『国風暗黒時代の文字』下II、塙書房、一九九五年。

注22 小島憲之『漢語逍遙』岩波書店、一九九八年。

注23 注11に同じ。

注24 注22に同じ。

注25 旧大系「補注」に次のようにある。「查(楂、浮き木、筏、槎)に乗って河を遡り天上に行ってひき返した張騫の故事。荆楚歲時記に「張騫尋河源、乗楼経月、至一処、見城郭如州府、室内有一女織、又見一丈夫牽牛飲河、騫問曰、此是何処、答曰、可問嚴君平、織女取支

機石、与騫俱還」云々とある。尚、博物志にも類似の説話がある(旧説云、天河与海通、近世有人、居海渚者、年々八月有浮槎、去来不失期、人有三奇志、立飛閣於槎上、多齎糧、乗槎而去…去十余日、奄至一処…遙望宮中、多織婦、見一丈夫牽牛渚次飲之」云々。これによれば星客を必ずしも張騫とみる必要はない。」

(はらだ まゆ 二〇二〇年日文革)